



●サポートセンターの予想と実際
協働の施設づくり。自由さに戸惑いも
荒木 サポートセンターの当初思い描いたイメージと現在の状況について感想を、お聞かせください。
五藤 整備検討委員会とワークショップが始まった当初、行政の方々に最初に案があるなら言っていただけないかと発言したんですが、「そういうのはありません、自由にやってください」と言われまして、自由な議論がたくさん出たんですけど、それで良いのかなというのが当時思っていたことです。特にワークショップの皆さん方が熱心にさまざまな議論をされて整備検討委員会に提案されてきたことに関し、こんなに細かいことをどんどん決めて管理主体になる人が出てくるんだろうかと心配していました。
大庭 最初に話を聞いたときはびっくりしました。柱の位置だけ決めますんで後は好きにしてくださいって、こんなに自由にしちゃって良いんだろうかと。けれ

ども、市民の皆さんがきちんと自らの規律を持ちながらいろんな意見を言って、市の予算の限られている中でどこまでできるかを追求していただいた、そういう姿勢が素晴らしかったと思うんです。最初の市民活動推進委員会*1の指針を作るときもそうですが、行政は後ろに控えてその舞台を作っていくという役割が良かったと思います。
たとえば、掲示ボードを固定式にするのか動くようにするのか相当議論がありました。私は今の可動式のパターンに反対票を投じたんですが、みごと多数決で却下されました。今まで施設づくりになると行政が中心となって、つくってきたのと違った形の市民との協働作業が初めてできたんじゃないかな、という気はしています。
*1：公募市民5名を含む17名で構成され、'04年8月から'06年7月まで、13回の委員会を開催し、さいたま市の市民活動の推進と市民と行政の協働の促進に関する指針を策定した。(p.22 参照)。



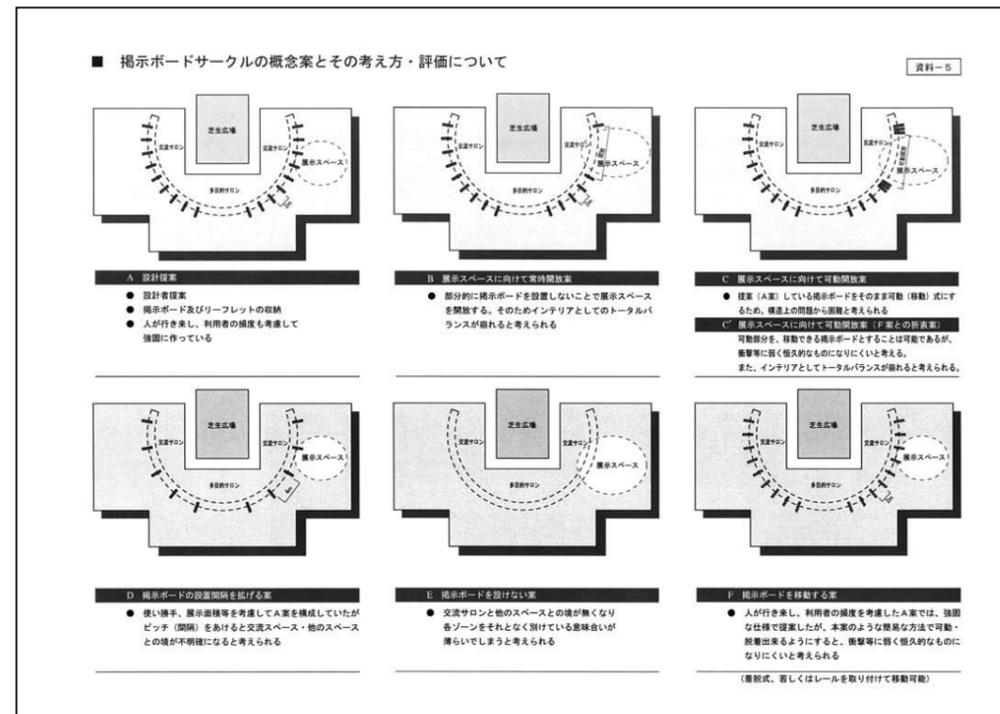
五藤 美昭 (ごとう・よしあき)
教育支援協会さいたま支部所属。さいたま市大宮区在勤。さいたま市市民活動サポートセンター整備検討委員会委員。



大庭 誠司 (おおば・せいじ)
さいたま市副市長。さいたま市浦和区在任。さいたま市市民活動サポートセンター整備検討委員会委員。



萩原 和代 (はぎわら・かずよ)
主婦。アシスト浦和21所屬。さいたま市浦和区在任。さいたま市市民活動サポートセンター整備ワークショップ・夢工房(第1期)、オープンガイイベントプロジェクトチーム(第2期)副リーダー。



第7回整備検討委員会で示された、掲示ボードの固定・可動パターン図。委員の意見は固定案と可動案に大きく分かれ、最終的に賛成委員の多い可動案で採決された。(p.31 参照)

荒木 たしか9対6でもって…
大庭 負けました。(笑)
荒木 萩原さん、市民の立場、また実際の使い勝手から見ていかがですか?
萩原 一番最初のワークショップのときに、広さの見当が全くつかなかったんです。行政の方がここまでオープンに「自由に皆さんの意見を」と言ってくたさるとは思っていなくて、いったい何をしたら良いのだろうと正直わからなかったですね。今使っているとさすがに市民の意見をかなり取り入れていただいて、

最終的には良かったと思います。
荒木 指定管理者の立場からは、どうでしょう?
三浦 もともと建築が専門で図面が読めますので、ひと目見まして「これは…」と正直思ったんですね。第2期ワークショップから参加しましたが、最初は運営者側にまわるとは思っていなかったんです。で、今時点で運営者としてざっくばらんに申し上げると、やはり広くて、すみずみまで目を行き届かせるのは大変だなあ

というのが正直なところですね。だからなおさら市民を信頼して使い手が自律的に秩序よく使う風土を作らないと…。運営側が管理者としてコントロールする考え方に立ったら破綻すると思っています。
荒木 市民活動経験者として平さんのご感想をお聞かせください。
平 公共施設のソフトの策定プロセスで、市民と行政がいっしょにやる、これはかなり画期的だったと思うんです。その協働作業で、小さいトラブルをなんとか乗り越えて市民もいろいろ知恵を出



三浦 匡史 (みうら・ただし)
さいたま市市民活動サポートセンター副センター長。地域生活デザイン主宰。さいたま市緑区在住。さいたま市市民活動サポートセンター整備ワークショップ・ユニバーサルデザインプロジェクトチーム(第2期)副リーダー。



平 修久 (たいら・のぶひさ)
聖学院大学教授。朝霞市在住。さいたま市市民活動サポートセンター整備検討委員会委員、さいたま市市民活動サポートセンター整備ワークショップ・市民参加プロジェクトチームリーダー。



徳永 緑 (とくなが・みどり)
さいたま市市民活動サポートセンター・常勤スタッフ。さいたま市浦和区在住。元宮崎市民活動センター・コーディネーター



司会 荒木 利治 (あらかし・としはる)
健康生きがいづくりアドバイザー。さいたま市浦和区在住。さいたま市市民活動サポートセンター整備検討委員会委員、さいたま市市民活動サポートセンター整備ワークショップ・コスモス(第1期)、市民参加プロジェクト・利用ルールプロジェクト(第2期)。

してきたつもりなんです。けれども、やはり限界がありますから、市民がある程度意見を出すまで、市の人がじっと我慢した上で細かい実際案を出し、また市民が意見を出す。そうやってうまく協働ができたと思います。

委員会とワークショップ、そして行政—自律と協働

萩原 ただ最初は検討委員会とワークショップのつながりが分かりづらかった…。

平 計画段階で2つの組織を作るのはいくつかあると思うんですが、サポートセンターの場合、委員会とワークショップの関係をだんだんと皆さん理解されてきて、なおかつ委員会の方もワークショップの意見を尊重しているのと決めた。だからワークショップの方も、自分たちの意見はかなり委員会で議論されて—採用されなかった場合もありますけれど—、それなりに納得してもらえたと思うんですね。

第2期はいくつかプロジェクトチーム(PT)が作られて—ひよんなことで僕も一つのPTのリーダーもまかされてしまったわけですけど—、そこに行政の人も参加して。でもPTは市民で考える場だから、そこに行政の人が入ってくるとどうかなという躊躇が若干われわれもあったんですが、あとあと市の人と調整する必要があるから、いっしょに議論し



ゴミ放置に悩んだ管理者による「お願い」。整備検討委員会ではゴミ箱を置かず持ち帰りをお願いすることとしたが、置いて行かれるケースもみられる。しかし、多くの利用者はゴミを持ち帰る。この掲示後は、こうしたことは少なくなっていることから、管理者は利用者の自律に期待をかけている。

てもらった方が効率的じゃないかということで、意思疎通が結構良くいったんだと思います。

「民」と「官」

荒木 大庭さん、行政サイドから見ていかがですか？

大庭 私、もともと国の役人として、NPOの法律を作ることに関わりました。どうしても行政側だと一番悪いケースを想定して、そこを規制するために法律を作るという前提に立つんですよ。NPO法を作る前に各省庁が集まって議論したときも、良いところを吸い上げよというより、そういう感覚だったんですね。そうするとNPOの方々から「何を言っているんだ、我々はちゃんと自律的にやるよ」と、「いや、皆さんはそうかもしれないけど」という議論をした記憶があるんですよ。

自分自身、そういう活動をしたことがなかったものですから、今回の最初の委員会からずっと議論をお聞きしていて、すばらしいなと思ったんですが、ここに来られている方は代表の方だからのかなと思っていたのです。ところが、8番館でのワークショップ*2の発表で、全体で1時間くらいやるという話だったんですが、正直各チーム10分発表なんて絶対取らず、たぶん3時間くらいかかるんじゃないかと思っていたんですよ。そこをタイムキーパーも皆さんでやられて、ピタッピタッとやるべきことをやられているのだと、これはやっぱり我々、より本気でパートナーとして考えなきゃいけないんだと、腹をくくって、これはもう我々は裏方に徹するしかないという気がしましたね。

荒木 ここまで来る間に行政側、特に支援室の方々には、ほんとに裏方で細かいところまで気を配っていただいてありがたかったんですが、後半になるに従って、こんなにもお互いに気持ちを通じ合えるものかなと思いました。今まで民間は行政に対して何か敷居が高いなという感覚があったのですが、少なくともわれわれに関する限りそれは払拭さ

れたと思っています。

●サポートセンターの現状

広さを活用する仕掛づくりが課題

荒木 まだオープンして4ヵ月足らずですが、指定管理者から現況と感じられていることをお願いします。

徳永 こちらは、条例に基づく登録制度を採っておりますが、今日現在で293団体が登録されております。飛躍的にこの数字は伸びてきたのではないかと思います。

一方で、広さは驚くべき部分がございます。エレベータから入ってきて、おおと声を出されるような方もいらっしゃるんですね。そして、広いがゆえに頭を悩ませる点も実はございました。たくさんの方に自由に出入りしていただいて、活動のきっかけづくりを見つけていただくことをご説明差し上げておりますが、中には、この自由さ、広さを市民活動という意識ではなくてお使いになる方がいらっしゃるのも事実です。そういうことに対して今後どう私たちがしかけていくか、日常的に継続的な交流の場として、この広さを市民の皆さん団体の皆さんにどう活かしていくか、自律的な方向で自ら企画していただく方向にもっていけるかはまだまだ模索中です。

また、備わっているいろいろな機能のうち、印刷や多目的展示コーナーについては非常に喜んで使っていただいている状況ですが、メールボックス、ロッカーについてはまだ半分に満たない利用状況です。

荒木 それは、利用する側が3月までの5ヵ月と利用期間が短いために遠慮されているんじゃないかと思います。せつかく決めても、またすぐ継続して利用できないのではないかという不安と不便さから登録できない面もあると思われますが。

徳永 年度で区切っております、4月からの利用についてお尋ねになる方も徐々に増えてきていますから、来年度1

*2：さいたま新都心にあった彩の国8番館において行われた第2回ワークショップ全体会(p.27参照)

年間長期に借りられるようになると、また増えてくる可能性もあるかと思います。また、やはり中間支援のNPOが運営させていただいていることを考えると、私もスタッフの使命として一番必要な相談機能だとか団体さんの運営についてアドバイスをしたりとか、ワーキングをしていくとかそういった点での機能整備というか、強化していく部分はこれから、まだまだスタッフの研修も含めて必要になると思っております。

三浦 それから、利用者もだんだん確実に増えているという実感はございます。この週末に来館者数が10万人を超えました*3。単にこのフロアに迷い込んだ人も含まれているんですが、「ここどうやって使うんですか」というところから始まった施設で3ヶ月ちょっとで10万人を超えるっていうのは相当なことだと思うんですね。だから、徐々に知られていって、使われていくのではないかと思います。

まずは認知度を高める

荒木 利用者として、いかがですか？

萩原 そうですね。私どもの団体では定期的に良く使わせていただいておりますが、やはり本来の市民活動団体ではない方たちが目につくんですね。ただそ

れをすぐに排除するとか、そういうことは考えちゃいけない。それはいわゆる「市民C」*4と言いましたっけ、ワークショップや検討委員会で出たそういう方たちだと思うんですよ。

それから現在は場所の認知度、特にコムナーレのそれが低いので困っています。しょうがなく浦和駅東口前パルコと書いたりして、チラシづくりに苦慮しています。だから、サポートセンターを知ってもらうには当面は何かに使って知っていただいて、家族に話してもらったり、特に若い方たちの口コミなどに期待を持っています。市民活動のチラシを置いてあったり、時々イベントもあるだろうし、会議している市民活動団体の話を聞く、そういうきっかけから市民活動っていうのはこういうのかなど気がついていただいたりね。

荒木 五藤さんのお考えは？

五藤 まだオープン当初だったんですけど、一度来たときは、朝早いせいもあったんですが、非常に閑散としてまして、受付の方が広いスペースに一人でぼつんとおられるような感じでした。整備検討委員会で検討している時は人があふれたら、「市民C」というような人たちにどうぞ遠慮願おうかみたいな話を

してましたけど、実際こうしてみるとそんなことよりももう少し認知度を高めてより多くの人に来ていただかないと、と思いますね。

●さまざまな利用者

子連れのランチに声をかける

荒木 利用状況を見ていますと、昼間は、お子さん連れで利用するお母さん方のグループがいらっしやる。そういう方々が交流して新しいグループができあがれば、それはそれでよろしいのかもしれないですね。

大庭 子育てをされているお母さんに、これからどう利用者になっていただきたいのかが、ちょっとわからないです。市内各所にある子育て支援センターに来られるお母さんはそっちに行ってると思うんですよ。公園に行く人もいるだろうし、冬だと寒いからちょっとここに来て遊んで。

でもほんとはその方たちもいろんな悩みを抱えていたりとか、友達が欲しかったんですが、非常に閑散としてまして、受付の方が広いスペースに一人でぼつんとおられるような感じでした。整備検討委員会で検討している時は人があふれたら、「市民C」というような人たちにどうぞ遠慮願おうかみたいな話を

三浦 当初から、ランチルーム的な親子のご利用がありましたので、プレイルームのそばに子育てマップ、ガイドマップ、ああいう子育て支援系のグループのチラシやパンフレットを集中して置いてみたり、塗り絵コーナーを作ってみたりというような場づくりをしてみました。そして、クリスマスのイベントや、親子向けの絵本の読み聞かせとか、パペットの親子向けのイベントをしたりしています。

*3：'07年10月25日の開館以来の来館者数の合計で、'08年2月11日に10万人を突破した。

*4：整備に関する提言書の中で、市民活動への関わり方の違いにより市民A、B、Cと表現した(p.26注参照)。



夕方には、ここで勉強する学生たちが多くいる。

学生との大事な接点を活かす

荒木 整備検討委員会で粉川さんが「おそらく嫌というほど来る」「中高生をどう巻き込むかが必ず大きなテーマとなる」と予測されましたが、夕方から夜は受験シーズンのせいもあるんでしょうか、まさにその通りになりました。(笑) いかがでしょうか？

三浦 私個人の意見としては学生の利用は問題視していないんですね。来ている学生に対して、3月に開催する予定のフェスティバル^{*5}のチラシや団体が企画している市民活動のチラシを声かけをしながら配布したりしています。

さいたま市で学生にそんな声かけをできる場所ってほかにはないと思うんですよ。ですから、その10人に声をかけて1人、2人かもしれないですけど、中学、高校、大学受験とそれぞれの年代がいてましてですね、やがて大人になっていくと。ほんとにいいきっかけになるじゃないかと。あからさまにうっとおしそうな顔をする学生もいますし、逆に関心を示す人もいます。

荒木 反応はある訳ですね。

三浦 反応はあります。学生と学生の間で大人が打ち合わせして、まだ私どもが荷物置きっぱなしの学生に「大人の打ち合わせがあるので席開けてね。」とお願いしたりする場面が多いんですけど、それも市民の自律っていうことで

いきますと、利用者の市民同士が席を譲り合う場面とかでコミュニケーションができて、良い接点があれば学生ボランティアや仲間探しのきっかけにもなるかもしれないです。

平 高校生に対して、すぐには結果を求めず長い目で見て、周りで大人がアフターファイブに、なぜこんなところに来てまじめに話しているんだろうっていう意識を持ってもらえばしめたものだと思うんですね。それでチラシを受け取って「あ、じゃあ」ということになるので。そういう無言の影響力ってのはあり得ると思うんですね。

三浦 もうひとつ、ここを利用したいがためにグループを作るという団体も少なからずあります。会則も規約もない、団体未満の方が使いたいと。じゃあということで会則のひな形をお示しして、公益的・地域に貢献する活動ということで、こういう目的をうたった会にしてくださいとお願いして会を作ってください例もありますので、その辺から少しずつ、しかけていきたいなあと考えています。

平 それとサポセンにとって利用者も重要なんですけど、市民活動から考えるとサービスを受ける側から自分が供給する側になってもらうかが非常に難しく、そのしかけが重要だと思うんですね。和光市で社会福祉施設の指定管理者をやっているところが、受付でおじいちゃん、

おばあちゃんに特技とか趣味を聞き出して、「こんど、こういう研修やらから講師やって」っていう、やや強引に今までサービスの受け手だったのを、やる側になってもらっています。このあたりを、いろいろ考えていただければなと。

●さまざまな課題

広いさいたま市に広域ネットワークを

荒木 さいたま市は範囲が広いですから、ご利用いただきたいといっても、なかなか交通アクセスからも、時間的な面から見ても大変だと思うんですけど、そのあたりはいかがでしょうか。

三浦 そこのところは来年度にはぜひ取り組みたい課題なんですけども、センターにさいたま市中から人を集めてこの場で何かをやるといよりは、むしろここが何か情報発信や運動の場、活動の場づくりになって、基本的には地域地域で、ご自宅のそばでというのが理想だと思うんですね。

やはり大宮の方、岩槻の方、遠いとおっしゃるんですね。そこで、さいたま市の市民活動サポートセンターを名乗るからには、やっぱり地元地域の中で活動できるノウハウとかネットワークとかを働きかける必要がある。そのためには、地域を今まで支えてらっしゃった自治会



*5：'08年3月20～23日に行われる、さまざまな市民活動団体が集う「第1回さいたま市民活動サポートセンターフェスティバル」のこと。上の図版は、そのチラシ

とか育成会とか地区社協とか既存の団体の方々とNPOとの出会いをしかけていかないとだめかなと思っています。どうしても市民活動サポートセンターというと、NPOを支援する施設と見られて、既存の今まで地域を担って来た方々が自分たちとは関係ないと思われがちなので、一所懸命そこに働きかける方を練っているところです。

五藤 それに関連して言うと、さいたまNPOセンターは、県とつなぐパイプや、いろんな県内のNPOとネットワークをもっている部分もあると思うんで、そういう連携をもっとできないかと思うところです。

情報発信・PRを積極的に

荒木 さいたま市、県内にとどまらず、もっと広く全国的にさいたま市民活動サポートセンターの存在をアピールする場合、ポイントとしては何かがあるでしょうね。徳永さんは宮崎で同じような施設に関わりを持たれたということなんですけど、いかがですか？

徳永 私は、昨年6月まで宮崎市民活動センターでコーディネータを務めておりました。宮崎でもいかに市民を巻き込むかの工夫をしております、たと

えばフェスティバルとか、企業からの寄付を市民の理解とともにつないでいくドネーション文化^{*6}を深めるための企画とかをしていました。そういった大きなプロジェクトは市民団体、市民、事業者、行政のすべてが入った四者協働の検討会議を長期間継続的に進めるという形を取っております。

私は北浦和に住んでおりますが、さいたま市は、浦和区、大宮区など、それぞれの区の特徴がありますよね。それをこちらに集約するというのも難しい部分もありますし、とって浦和区だけのものであって良いものでもございません。そういう中で地域の特性を生かすための、また公益的な部分との整合性をもった企画力が問われてくると思うんですね。

●今後の展望

地縁団体との協働

荒木 サポートセンターは、市民に開かれる、市民とともに成長する、集まりやすく居心地の良いサポートセンター、という3つの理念をうたっていますが、市民はこのあたりをどう受けとめているでしょうか。

確かに居心地は良さそう(笑)なのはよろしいのですが、市民参加という切り口

から見た場合に、果たしてこれをどういう形で市民に呼びかけ、また理解してもらうのがこれからの展望課題になると思います。この辺についてどうでしょうか？

大庭 やっぱり私も行政側としては、地域を支える団体としては自治会とか地域防災組織とか、PTAといった地縁団体ってすごく大切だと思っています。そういう人たちの会とかですね、あるいはいろいろな活動の場としてもここを使っていただくことがやっぱり大きな課題かなという認識の中で、たとえばそういった地縁系団体の連合会にもっと見て来てもらうと良いのではないかなと思うんですね。

三浦 地域の自治会と連携するには、もうちょっと積極的にしかけないとだめだろうとは思っていて、これは私の腹案なんですけれども、たとえば地域防災、安全・安心というようなテーマを上げて座談会のようなものをやってみると

*6：寄付行為を重視し、それによって市民活動や文化活動などを行おうとする文化。欧米、とくに英米圏では宗教的や自助の伝統、税制などが後押し、NPO活動の主要な資金源となっている。



浦和駅東口駅前の「市民広場」にて地元地縁団体が主催したもちつき大会。大勢の観客を集めた。

か、なにか自治会の方もピピッときて、そこに民生委員さんとか、地域で活動されているNPOの方とかの力も必要だなと思われるような共通の関心事で具体的にテーマを上げて。基本的に自治会が地域防災を担っていると思うんですけど、実は、おひとり住まいの方とか、地域の障がいをもたれた方とか、助けが必要な方が見えていない地域が少なくないと思うんですね。

そういう中にNPOとか市民団体の方がネットワークを持っていたり、地域にある学生・学校の力が助けになったり、民生委員さんの持っている情報が必要であったり、そういうテーマで話し合うというような具体性がないと、反応が鈍いかなと。

五藤 市民団体って、自分は自分というところがあるけどどうしても抜けられず横の連携は非常に難しい部分があって、私もそういう団体をやってますのでよくわかるんですけど、そこを乗り越えて、やっぱりここを中心にしてここで情報発信

ていくことがサポートセンターのひとつの課題かなと思うんです。

三浦 よく思うのはITに精通した人は、ITを教えることには熱心なんですけど、それを使ってたとえば子育てグループとか自治会とか、他の分野にその技術をうまく転用して応用してっていう風に各団体が思ってくださいと、その時点でパッと世界が広がるんで、そういうきっかけが欲しいですね。

荒木 それをコーディネートするような人がいるといいですね。

大庭 多分行政が、あるいは企業が管理していたら、そういう団体間の連携をやるうとか、あるいは一つの目的を持ったイベントを次々にしかけてみようという発想はむずかしいんじゃないかという気がします。どうしても行政は縦割りです、老人クラブであれば保健福祉局が、防犯組織であれば市民局がと、他の組織と合わせて地域全体の地域力を上げようという意識があまり強くないんですよ。それから、行政はつい組織内

を気にしてしまいますが、ここは市民がどう使いやすいだろうかをまず考えておられますね。そこに期待もっています。

高齢者との協働

荒木 老人クラブと行政の関係はどうでしょうか？

大庭 老人クラブ活動はどちらかというと自主的な活動にまかせていますね。もうちょっと区が間に入ってやんなきゃいけないのかなと気がしていますが。この4月にシルバーバンク^{*7}を立ち上げて事務所もこちらに置かせていただくことにしていますので、それこそNPOの皆さんとの連携もできるんじゃないかなという気もします。

五藤 老人クラブについては私も関わりがありますが、あんまり行政が関わってしまうとある面その人たちの自立を妨げ

^{*7}：高齢者の地域活動参加を支援するための新しい事業。登録した60歳以上のさいたま市民と、その経験や技術などを必要とする団体・施設等とのマッチングを行う。



浦和レッズのアジアチャンピオンズリーグ優勝に際して、特別写真展示がサポートセンターで特別な動線を作って行われた。これがきっかけになって認知度が上がったとも言われる。



る部分があると思うんですね。あなたたちも市民なら私たちも市民なんだから同じ目線で活動しましょうよっていう対等の関係は市民同士がやっぱり持つことが必要だと思いますね。

たとえば、シニアユニバーシティ^{*8}では、行政がやっていた時代に比べて、私どもが関わるようになって「こんなことまでやるんですか」ってよく言われるんですよ。「こんなことまでやるんです」と私は言える立場だと思うんですね。行政はなかなかそうは言えないんで。せつかくNPOがやっているメリットとはそういうことだと思うんです。

三浦 サポートセンターの特徴として大変高機能な印刷作業室があるんです。で、高機能ゆえに、利用される方には敷居が高い機械もあるんですよ。お持ちいただいた古いデータを、印刷に必要なpdf形式^{*9}に転換するなんてことをやっているんです。(笑) そのときにも、なるべく全てやってあげず、「こうやってやるんですよ」と最初はお教して、「次からできると良いですね」みたいな感じでやっているんです。

実はその印刷作業室のオペレーションは職員にとって負担が大きくて、あそこにサポーターの方がいてくださったらどんなに

^{*8}：さいたま市が、さいたま市シニアユニバーシティとして、市内居住の60歳以上の方の生涯学習のためにやっている事業。毎月2~3回ほど、さまざまな分野の講座が実施され、文化祭やクラブ活動なども行われている。http://www.saitamasenior.com/

^{*9}：パソコン上で文字や画像を含むデータを、製作に用いたソフトウェアを問わずに記録する形式。

心強いかと、これからそういった方面でスキルを持った方がどんどん輩出されるんじゃないかなと思うんで、ITに精通した熟年の方ってかっこいいですね。(笑)

五藤 そういう時に、たとえばシルバーバンクに登録してくれる人たちをどう巻き込んでいけるかも、このテーマですね。

「協働」の実感体験

荒木 市民と行政の協働という大変心地よい提唱のもとにこのサポートセンターが構築されてきたわけですが、皆さん協働を実感されてますか？

平 協働っていろいろな定義があって、市民活動推進委員会でも協働の定義をしたわけですが、具体的に考えていくと、どこからどこまで協働なのか皆さん違っているのが、整備検討委員会の議論の中でも出てきました。特に管理運営方法に関してその辺が出てきたと思うんですね。

ただ議論の中で行政の人と市民がいっしょに考えて、そういう一体感は醸成されていったと思うんですね。最近、いっしょにやる協働、いっしょにやらない協働って言うよくわからない話もあるんですけど、やはりいっしょにやって一体感が形成されないとやったという感じ



印刷室のカラー印刷機では、コンピュータの操作が必須となっている。

は出てこないんじゃないですか。

五藤 これだけ一所懸命議論したことなのだから、ぜひこれは整備検討委員会、ワークショップの皆さん方で、管理運営の方にも関わっていったら良いんじゃないかなと意見を申し述べたこともあります。が、ここで議論している人以外の団体もまた管理者になる可能性があるんだということだったかと思います。幸い、当時いろいろ関わっていた方々が管理運営に関わりましたが、それだけに(現指定管理者は)真摯に議論していた当時のことを思い出しながら運営していかないとまずいだろうというのが今の感想です。

大庭 市民が市民に言うんでも、市民が行政に言うんでもこれからは同じのような気がするんですよ。ただ今まではどっちかという市民と行政というのは対立の構造で、市民は何か文句を言わなければいけない、それで行政が何か改善する、できることとできないことを分ける。そうではなくて、意見を言いあえるんだけど、それをどこかである程度の理屈の中で収めないといけないというお互いの気持ちがより強くなっていく気がしますね。

さっきの2年前のワークショップでまさに感じましたのが、そういうことでした。

指定管理者も市民か

荒木 さいたま市のサポートセンターの場合には市民活動団体のみが応募できるという条件^{*10}があって、今の指定管理者がありますね。この施設の場合は指定管理者も「市民」なのでしょうか？

平 「市民」ですよ。

荒木 そう捉えてよろしいわけですか。

平 指定管理者という言葉だと通常、民間企業がやりますから、誤解を招くので別の言葉にしようっていう意見もあったのですが、そうするとまた別の誤解があるので。

^{*10}：指定管理者募集要項において、暴力団の排除など一般的な入札制限条件に加えて、さいたま市内に事務所をおき3年以上継続して市民活動を行っている団体であることが条件として示された(p.60 参照)

荒木 行政より指定管理者の方がキビシイなんていう声も聞かれますけどね。(笑)

五藤 管理はそうなりますよね。行政がやるより指定管理者がやった方がよっぽどがちがちと、こう管理しちゃう。

三浦 指定管理者は「市民」であり続ける、とそういう風に思い続けたいためになりそうですね。それはやはりそういう風に見られない場面もありますし、

それからつつい利用者与管理者という関係になってしまうことがあるんで、やっぱり公共の場を担う担い手として利用者も管理者もないんだという、同じ場を運営しているという意味では秩序を形成する、場を共有する人っていうことですよ。

荒木 なかなかむずかしい立場ですね。つくっていく過程で、途中まで市民と行政があって、指定管理者はその間に途中から入られた訳ですね。現在ではだいたい指定管理者の部分のボリュームが広がっているんじゃないかと思うのですよ。

平 指定管理者の方にかなり期待が集まると思うんですけど、要は「市民」が運営している非常に大きい公共施設っていうことで、今後、こういうことが広まるかどうかは皆さんたちにかかっている(笑)と思うんですね。

指定管理者の立場に立つと、市民が行政のことを良く理解し、一方で行政の人が市民のことを理解するというので、両方の歩み寄りができると思うんですね。そういう成果も一つあると思うんです。

三浦 何のために協働するのかっていうところに戻ってくると思うんですよ。

公共サービスを市民自身が担おうという



指定管理者が正式オープン前に行ったUD体感研修の様子

志なわけで、税金払っているんだからその税金でなにごとにもよきにはからしてもらって、うまくいかないことは文句を言うというのではなくて、自分たちで自分たちのサービスの一端を担い、場の秩序も保つていう感覚がないと、「市民」にはならないと思うんで、利用者も「市民」になってもらわないといけないし、指定管理者もいつも「市民」であろうとしなないとだめだろうと思います。

効果測定と説明責任

大庭 ただいま言われた新しい市民像とか市民意識を作っていくことは大きな目的だと思うんですが、ちょっと行政側のスタンスで言わせていただくと、たぶんもう2年くらいすると効果測定がどうしても出てくるんですね。非常に精緻にやっていたら外部監査*11がおそらく実施されると、そのときには違った目で見られる。

一定のお金を行政として使っているわけですから、それでなにが得られたんだということを、議会との関係できちっと説明ができなければいけない。

三浦 効果測定、評価に耐えることは絶対必要ですね。我々、数値で示せる部分も含めて内部評価も当然必要ですけど、きちっとした外部の評価を受けられるようなしくみを作らないといけないと思います。

徳永 市民が市民を評価する、意見を言い合うということですが、やはり指定管理者としての責任、市民としての責任があると思います。私も指定管理者が同じ市民の立場で協働していくための信頼と協働のアイデアを、これから指定管理者の責任において出していくことも大事ですし、運営協議会・利用者懇談会の方々も市民として、外部評価する――また別の外部評価はあるかもしれませんが

* 11：監査機能の独立性・専門性の強化を図るため、地方自治法で定められた、弁護士、公認会計士等の外部監査人資格者が監査を行う制度。政令指定都市は会計年度ごとにテーマを定めて監査する「包括外部監査」が義務づけられている。ほかに市民・議会・市長からの要求に応じて行われる「個別外部監査」がある。



議論すべきことが多く、今後の活躍が望まれる運営協議会(写真は2007年12月23日に行われた第1回の様子)

けど――地縁組織などを含めたさまざまな機関が豊かな関係性を築くことで、いっしょにこのサポートセンターを作っていくことが必要ではないかと思えます。

平 評価に関しては、絶対的な評価はやはり必要ですが、相対的な、要は民間企業が指定管理者をやっているところと「市民」がやっているところっていう違いの面からも評価していただきたいなと思えます。

それから指定管理者だけが評価されるべきではないと思えますね。市が効果測定する場合、結局われわれの市民活動がどうなっているのかも対象になるので、効果測定はわれわれ「市民」にも責任がありますね。

荒木 それであえて「指定管理者も市民か」という投げかけをしたんですけども、深く考えると、そこへ入ってくる「市民」とはなんなんだ、また具体的に何をもちて市民参加というのかという疑問が生まれてくると思うんです。

市民主催の運営協議会・利用者懇談会

五藤 その辺は整備検討委員会で結構議論したと思うんですけど、あのときに協働管理運営組織が考えられて、連絡調整会議や運営協議会が開かれる*12。私が、どっかかという外部の人間がやった方がいいんじゃないかと申し上げたときに、運営組織にしてみれば外部の

* 12：指定管理者・市民・行政が協働して運営できるよう考えられた組織。指定管理者と市の連携のために連絡調整会議が、市民の声を反映させる機関として運営協議会・利用者懇談会が設けられる(p.58-59参照)

人にあーじゃこーじゃ言われると、かえって運営を妨げるっていうようなことを言われたんですけど、私はまだそうは思っていない部分があって、利用者懇談会なり運営協議会なりでいろいろ意見を戦わせることが市民とともにとか、成長するとかいうファクターだと思うんですね。あんまり仲良しクラブ的では将来的にまじいだろうから、外部の人たちがいろいろ意見を言う窓口は開いておくことが必要と思っています。

荒木 今回運営協議会が生まれて、第1回目の利用者懇談会も近々開かれることになっております。特に利用者懇談会が市民の声を聞く、あるいは参加のきっかけになる機関だと思うんですが、果たして参加者の参画意識が高められるのか、いかがでしょうか？

平 そこで皆さん、こうして欲しいああして欲しいという要望や文句を言う機会を期待しているのか、どうなんですか。

萩原 その辺は、ほんとに何を言ったらいいのか、言ったことがどう繋がっていくのかという点が分からないと思うんですね。市民団体というのは基本的にわがままですから、文句だけっていう場になって、発展性のないような形ではもったいない気がしますね。次に繋げて、成長するサポセンという理想を目指してやっていたきたいとは思いますが。

平 運営協議会というのは指定管理者が設置して、市の方も入ってますけれども、市民が中心になってやっているんですよ。そして運営協議会が利用者懇談会を主催しているんです。だから市民が市民に対して意見・要望を出すということで、これはさいたま市にとってたぶん初めてですね。

我々運営協議会メンバーとしていつもは市に要望・文句を言っていたのに、受ける番になっちゃいました。我々が期待したいのは最初は要望・文句がぼんぼん出てくると思いますけれども、市民が市民に言うということはどういうことなのかを学ぶ機会かなと思います。言っただけじゃだめだというのをいつか気がついてもらえればありがたいなと。

五藤 ここが情報発信基地として何が今後できるのかというのは、指定管理者だけが考える話じゃなくて、周りにいる人たちがこうやって盛り上げようよっていうような提案型にしていかないと、どんな協議会、どんな懇談会もあんまり前向きじゃないだろうなとは思っています。

萩原 その運営協議会が「市民」だっという認識を参加される方が持っているかどうかですよ。

市民が市民をサポートする「成長」

徳永 市民の自律とこちらから仕掛けることのバランス性も大事で、そのあたりでもまだまだこれから知恵、工夫をしぼっていかねばならないと感じているところです。

このサポートセンターが、出会いの付加価値を高める場となるように努めたいと考えています。

五藤 自律というのは、場の提供だけして、あとはもう団体同士が踊ってもらうということもありますね。

平 市民活動推進委員会で議論してはっと思ったのは、市民が市民をサポートしたっていいじゃないかということ。これを行政の方が言っちゃおうさんくさく聞こえるんですけど(笑)、市民が言う「ああ、そうか」と。サポセンはまさにそういうことだと思うんです。指定管理者が市民を助けることもあるし、利用者が同じ市民同士である利用者を助けあうこともある。それが増えればサポ

センの「成長」と言える気がします。

五藤 なかなか行政では難しいことが、NPOがやっているわけだから、少し違った視点でいろんな活動を東ねていくことができるかもしれない。場合によっちゃ少し暴走するかもしれないが、そのときは運営協議会や利用者懇談会からやり過ぎじゃないかというご意見をいただければいい話なんだと思うんです。

大庭 そういう意味で市民活動団体の皆さん方にこういうセンターをやっていたら、あるいは運営協議会の中で議論しながら大きな視点で市全体を見ていただき、地域の底力をさらにアップできるような枠組みができたんじゃないかなという気がします。

ただ長くそういう意欲を持ち続けるのも大変なことだと思います。そこをぜひ、みなさま方の力で末長いすばらしい施設にしていだければと思います。

三浦 開かれ、成長し、居心地良くと。居心地の良さとか開かれ具合は徹底的に心がけています。成長するのびしろも無限大かなと思ってますので、どんどん成長していきたいですね。

荒木 さいたま市のサポセンを全国に誇れるのは、やはり今までご発言いただいたことがある程度固まってから初めて言えることだと思います。本日は、ありがとうございました。

(2008年2月13日。於：浦和コミュニティセンター)



様々な意見が出され、交流も行われた第1回利用者懇談会(2008年3月2日)

協働中と協働後の間

この冊子は、市民活動サポートセンターの計画にあたって、さいたま市が協働による施設づくりを目指し検討体制を模索し始めた時から、さいたま市で初めての市民活動支援の拠点施設が誕生し、この冊子ができ上がるまでの記録です。

そのため、本書には、市民と行政の協働が主張されるようになった背景を分析する中村整備検討委員会座長による論文から始まり、サポートセンターづくりの経緯と、そこに参加した市民たちの提案、そして参加した各人の感想などを誌面の許す限りとりまとめました。

自己内対話——冊子づくりも協働で

市民活動支援室の提案により、この冊子の制作もまた市民との共同作業で行われることになり、検討委員とワークショップ参加者から呼びかけに応じた8人と支援室の3人で、編集委員会が組織されました。

中村座長の論文以外の文章は、参加した市民と支援室とが分担して書いたのちに、編集会議で皆で検討・調整してつくりあげていったものです。市民メンバーの中には編集を生業とするものも含まれ、その経験・技術と機材（プロ用のDTPソフトなど）が活用されましたし、編集会議の場所の用意や資料の取りそろえ・後述する座談会の準備・印刷業者の発注などでは支援室が事務局役を担って活躍しました。つまり、この冊子づくり自体が、サポートセンターづくりと同様に市民と行政の「協働」のたまものであります。

我らが心は一にあらず

編集作業は、サポートセンターが始動して間もない'07年11月から始まりました。11月から12月にかけて、5人の編集準備委員と支援室職員で、まずは冊子の構成・総頁数や取材（インタビューや座談会）、図版写真などの資料の確認などの準備作業をしました。

サポートセンターづくりの色々な局面に係わった人は非常に多いので、そのリストアップにもかなりの手間を要しました。また、この時期に編集会議で様々な話していく中で、初めて知ったことも多くありました。同じ事象も全く違った印象で捉えていることさえも多々ありました。それぞれの編集委員が別々の立場で色々な役割を果たしていたために分散されていた知識・経験が本冊子をつくることで初めて総合されたという面があったのです。

言わざりしこと

'08年に入って、関係者へのインタビュー取材や冊子の詳細（ページ構成やレイアウト）を検討しました。

1月には、福島委員の発案・幹事で、「第1回整備検討委員会およびワークショップ参加者の同窓会」を開催し、オフレコ本音取材を取行しました。同窓会には、中村座長、矢ヶ崎職務代理、大庭副市長を始め、異動してしまっていた支援室職員など、総勢20名が参加し、大いに盛り上がりました。

また、ワークショップに参加した何人かの市民や元支援室職員にインタビューを行ったのもこの時期です。連日のワークショップにつきあっていた支援室職員が市の人事から残業の多さを注意されたことや、参加した市民が内心思っていたことなども、この時に改めて知ることができました。

こうした取材内容の一部はこの冊子に紹介してありますが、誌面の都合と「大人の事情」で多くの部分を割愛せざるを得なかったことはとても残念です。

2月には、検討委員、ワークショップ参加者、指定管理者による座談会（p.76-85）を開催しました。この間並行して、取材原稿や活動記録の原稿化などの作業をしました。座談会では、2時間半にわたって活発に話し合いが行われ、分量の都合で割愛せざるを得なかったそのごく一部を除いて掲載できました。一般に座談会というものは、話があちこちとつちらかり、言語不明瞭で収拾がつかなくなることも多いのです

が、今回はそんなこともなく、参加された皆さんの知性と良識に感銘を受けました。

なお、誌面の関係で掲載できなかった整備検討委員会やワークショップグループ、PTの活動などの細かな記録は次頁で紹介しているホームページなどに載っています。関心のある方は、そちらもご覧いただいて確認願います。

春と修羅場——一粒の麦死なずば…

そして2月末から3月初旬にかけて、ほとんど本業や家事・子育てそっちのけで原稿づくりに追われ、写真撮影や図版作成も多く、きわめて多忙な日々を過ごしました。

結局、準備打ち合わせから入稿まで、編集会議は、18回におよびました。できるだけ読んで楽しく、協働の実像が伝わるような冊子作りを心がけました。

これからの市民と行政の協働や市民活動のヒントとなることをいくつも載せています。例えば、市民ワークショップグループから代表を選出する時の課題（p.24）、建物・設備に関する市民参加タイミングの問題（p.30,70）、職員が市民の会議に参加するタイミングと意義（p.51）、市民参加と議会の関係（p.52）、市民参加への行政の不安感を払拭する方法（p.60,78）、予算に係わる実務への参加の課題（p.62-65）等々。

他にも参考になるところは多くあると思います。編集に係わってきた自分たち自身、今にして思えば、こうすればもっとうまくやれたなというところも数多くあります。手にとって下さった皆様のこれからの活動の一助になれば幸いです。

編集に係わっての一言（50音順）

荒木利治：編集長 集団の共有する習慣が文化——この活動拠点から新たな文化の発信を。

織田真由美：市民活動支援室職員 サポートセンターの整備から、この冊子づくりまで、市民パワーに支えられてばかりで、市民と行政との対等な協働といえたのかと反省。今後は、皆さんにふさわしいパートナーとなるべく、協働道を極めていきたいです。

菊地順子：編集委員 すったもんだの2年間。終わったけれど、続きます。閉館音楽♪家路♪を何回も聞きました。

島崎正彦：市民活動支援室職員 市民の人と協働して、ボランティア精神と市民力の高さを実感しました。これから、もっとたくさんの市民が関わって、サポセンという列車は協働の線路をどこまでも行くと思います。

白石リン子：編集委員 周りの市民活動団体の方たちを見て、市民活動とはどういうものかということを教えていただきましたし、新しい出会いがあっても良かったと思います。

平修久：編集委員 編集に関わって、2年間の委員会とPTでの議論を呼び覚ました。そして、市民が関わる協働管理運営の重要性や難しさを改めて認識しました。できるまでも大変だったけれど、できてからも手や足が抜けない。

大工原潤：編集委員（副編集長） 編集会議にはいつも遅刻してすみません。各章の題名や小見出しの案づくりなどでは、根暗なダジャレを頻発しましたが、見捨てなかった皆さんに感謝。

中野一恵：編集委員 このワークショップを始めた頃、この街の市民活動はまだまだひよっ子で足取りも覚束ないのに、このだだっ広い施設を使いこなせるのかと危惧しました。今、ここに来て、老若男女が三々五々集い、活動しているのを目にして、立派な器を与えられれば、それに映える料理を作りだせるのだと期待します。市民力の真価が問われるのはこれからです！

松下孝子：編集委員 市民ワークショップのメンバーとしても、小冊子の編集にも「枯れ木も山の賑わい」程度のことでしかできなかったが、その程度でもないよりマシだったかな。サポセン、愛着がある。ずっと見守り続けたい。

福島まり子：編集委員 ICレコーダーを片手にこの施設に関わった方々の声を拾い集めました。そこそこに散らばった言葉たちがこの冊子に彩りを加えられていたなら、少ししあわせ。

安田淳一：市民活動支援室長 「市民と行政の協働による整備」と書いてしまえば簡単ですが、サポセンの整備は人々の膨大な時間と労力が投入された一大事業でした。互いに信頼し、一つの目標のために協力して仕事をやり遂げた達成感は格別です！



ある日の編集会議

参考資料

1. 整備検討委員会委員名簿（敬称略）

学識経験者：粉川一郎、中村陽一（座長）
知識経験者*1：平修久、鳥生公子、東一邦、矢ヶ崎紀子（職務代理者*2）
市民活動の実践者*3
五藤美昭、田中愛子、谷口富貴子、福島まり子、山田長吉
渋谷仁（2007年3月31日退任）／武者清人（2007年4月1日就任）
市民（ワークショップ代表者）
青羽利勝、荒木利治、北川靖夫、中野一恵、野田静枝

さいたま市職員：大庭誠司

*1：知識経験者とは、この整備検討委員会では、さいたま市の市民活動関連政策の連続性を勘案して、先行して議論が行われた「さいたま市市民活動推進委員会」（22頁参照）への参加者から選ばれた委員のことを指す。

*2：副座長のこと。

*3：教育、IT、中間支援、男女共同参画、消費生活、自治会、国際交流など、さまざまな分野で市民活動を行っている団体から推薦を受けた委員のことを指す。

2. 第1期ワークショップ・グループ活動日

ワーク 21：'05/10/18,25、11/ 8,22、12/ 3、'06/ 1/10,12,17、2/13,17（合計10回）

夢工房：'05/10/14、12/ 2、'06/ 1/13,20、2/22、3/ 3,9,10,18（合計9回）

コスモス：'05/10/19、12/ 1、'06/1/12,23、2/ 9,28（合計6回）

やおよろずの会：'05/10/ 8、11/17、12/20、'07/1/12、2/20（合計5回）

休日返上グループ：'05/10/23、11/23、12/25、'06/1/9、2/19、3/5（合計6回）

3. 第2期ワークショップ・プロジェクトチーム等活動日

市民参加：'06/11/2,27、12/4,18,21、'07/1/4,11,15、6/4、7/13（合計10回）

サービス内容：'06/11/1,9,17、12/18、'07/1/12,16（合計6回）

ユニバーサルデザイン：'06/12/18,27、'07/3/14、6/13、7/5,13（合計6回）

利用ルール：'06/11/24、12/8,18、'07/1/17,18、6/9,19、8/16,27（合計9回）

情報支援：'06/11/10,18、12/18,23、'07/1/16、3/5、6/5、7/12、8/3,7,14,24、9/4,14,21、10/1,5,16（合計18回）

オープニングイベント：'07/2/14、3/14、4/18、5/12,14,30、6/13、7/4（合計8回／他にミニ会議が13回）

オープニングイベント企画委員会：'07/8/4,31、9/7,20（合計4回）

オープニングイベント実行委員会：'07/7/28、8/10、9/15,29（合計4回）

PR：'07/2/7,22、3/28、4/25、5/12、6/14、7/10,26、9/12（合計9回）

より深く知りたい方は

本書では、誌面の関係で多くの事柄を割愛せざるを得ませんでした。サポートセンター資料コーナーおよびさいたま市のホームページ（<http://www.city.saitama.jp/index.html>）には、市民活動サポートセンター整備基本計画や条例の全文はもとより、つくるにあたって行われた15回におよぶ整備検討委員会の全議事録と配布資料、11回におよぶワークショップ全体会の配布資料（各グループやプロジェクトチームが作成した資料など）の全文がそろっています。より詳しく知りたい方は是非、これらをご活用下さい。なお、本書全文のpdf版を市民活動サポートセンターのサイト（<http://www.saitamacity-support.jp/>）に掲載しています。電子版が必要な方はこちらをご利用ください。

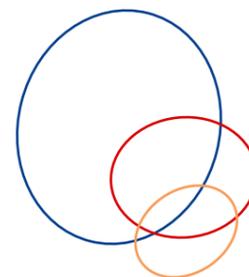
謝辞

本書を発行するにあたっては、ほんとうに数多くの方々にお世話になりました。とくに、下記の方々や団体は、取材への対応、資料提供などでたいへんお世話になりましたので感謝の意を込めてここに記させていただきます（いずれも50音順・敬称略）。

個人：大沢教男、奥富晃、木村通恵、野口敦史、東一邦、若林一彦

団体：（株）アール・アイ・エー（p.29-30,45）、旭化成（株）（p.10）、（株）アン・シュトース（p.82）、（株）エスエス（p.2-3,15）、

（株）大林組（p.2-3,15）、（株）埼玉新聞社（p.25,55,61）



さいたま市市民活動サポートセンターができるまで

【協働の760日】

発行日	2008年3月26日
発行	さいたま市市民局市民部コミュニティ課 市民活動支援室 さいたま市浦和区東高砂町11-1 コムナーレ9階 Tel.048-813-6403 / Fax.048-887-0164
編集	さいたま市市民活動サポートセンターができるまで 編集委員会 メンバー：編集後記参照
デザイン	（有）スタジオ テックス 新井 崇
制作	（株）シード 浅川正敏

さいたま市市民活動サポートセンターのご案内

〒330-0055 さいたま市浦和区東高砂町11-1
コムナーレ9階
Tel 048-813-6400 Fax 048-887-0161
<http://www.saitamacity-support.jp/>
開館時間：9：00～21：30
休館日：12月29日～1月3日

本書は、できるだけ多くの方に読んでいただきたいため、
無断で複製することを可能とします。ただし、複製物の
販売と無断での改変はご遠慮下さい。